

【小学校・職場や就業に関わる体験活動】

先輩や地域の「プロ」とかかわりながら、
人間としての生き方を考える活動

活動名 たいが人間熟～出かけよう自分探しの旅(12年度-6年生)
すいせいヒューマンタッチ～未来を見つめて(13年度-6年生)

新潟県柏崎市立比角小学校

学校の概要

学校規模

学級数：22学級(内特殊学級2学級)

児童数：605人

教職員数：33人

体験活動の観点から見た学校環境

学区は柏崎市(人口約9万人)の中心部に位置し、旧住宅街と商店、金属工業団地と新興住宅地、大型店舗街などが新旧混在している。

地域住民の年齢層・職業層は多種多様で、近年は共働きの家庭も多くなってきているが、創立127年の歴史と伝統ある学校を尊重し、教育活動に深い理解を示すとともに協力を惜しまない。

教育目標「いのちを大切にし、やりぬく子」をスローガンに、教師と子ども、地域が一体となって生涯教育の理念「人として生きる」の具現化を目指している。

子どもたちは明るく素直である。しかし、自分の考えをもち積極的に表現することについては課題を残している。

連絡先

〒945-0044

新潟県柏崎市扇町2番22号

電話：0257-22-5213

FAX：0257-22-5214

ホームページ：

<http://www.kisnet.or.jp/hisumi/>

電子メール：hisumi@kisnet.or.jp

体験活動の概要

活動のねらい

比角小学校の卒業生(先輩)や「その道のプロ」との交流を通して、人間としての生き方を学ぶ。

個人やグループで、生き方を学びたい人に密着取材し、自分の生き方を見つめ直す。主な活動内容・方法(位置付け・期間等)

年間75時間(総合的な学習の時間)

- ・ オリエンテーション(人間探求への興味の喚起)5時間
- ・ 先輩や専門家との交流体験(校内)20時間
- ・ 生き方を学びたい人への密着取材・職業体験(校外)20時間
- ・ 「人間」についての個人追究活動15時間
- ・ 自分の生き方の提案(卒業に向けて)15時間

体制等の工夫

活動内容に応じて、個人、学級、学年全体、目的別グループと、活動形態を柔軟に変える。指導体制も学年TTを主とした。

学習サポーター(保護者)の協力を得て、安全に配慮した。

関係諸機関との密接な連携を行った。

活動の成果等

卒業論文で、どの子ども自分なりの生き方を書いてきた。

主体的に人とかかわり、共感したことを自分なりに表現する態度が育った。

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

- ア 自分がふれあいたい人やその道のプロ（地域の人々）とのかかわりを通して、様々な人間の生き方があることを知り、人間としての生き方に興味や関心をもつことができる。
- イ 自分のテーマをもち、方法を工夫しながら人間としての生き方を探るための追究活動ができる。
- ウ 人々とのかかわりを進めていく中で、これまでの自分を見つめ直す楽しさや、新しい自分に気付く喜びを味わうことができる。
- エ 自分の生き方に対して、新たな課題をもつことができる。

(2) 全体の指導計画

ア 活動の名称

「たいが人間熟～出かけよう自分探しの旅」(平成12年度)

(「人間熟」の「熟」には自己決定の経験を重ね、人間として成長してほしいという願いが込められている。)

「すいせいヒューマンタッチ～未来を見つめて」(平成13年度)

イ 実施学年

第6学年

ウ 活動内容 []は13年度

(ア)【ようこそ先輩，比角小学校へ [その道のプロに学ぼう]】(20時間)

各分野で活躍している卒業生や専門家を学校に招き，対話や共同作業を通して，交流する。

(イ)【訪ねよう，人生の師匠 [密着取材！人生の師匠]】(20時間)

実社会で興味ある生き方をしている人，関心のある職業に携わっている人など，生き方を学びたい人を見つけ，丸1日密着取材する。

(ウ)【ザ・チェイス人 [すいせい人間学会]】(15時間)

人についての自分なりのテーマをもち，資料を集めて追究する。

エ 教育課程上の位置付け

教育課程内の総合的な学習の時間（名称よろんごタイム）として位置付けている。

オ 実施時期（日数や時間数）

年間総時数75時間

カ 活動場所

学校内，及び「生き方を学びたい人」の仕事場

キ 継続の状況等

年度当初のオリエンテーションで，5年時に行った総合的な学習「食と生命」を通して学んだことについて確認した。稲や豚を育て，結果的にその生命を頂く私たち人間という存在を想起し，では「人間としての生き方」とは何だろうと問いかけた。

活動は継続的に個人テーマを追究する【ザ・チェイス人 [すいせい人間学会]】，イベント的に先輩や専門家を招いて交流する【ようこそ先輩 [その道のプロに学ぼう]】，そして，学校を飛び出し，丸一日「生き方を学びたい人」に密着取材する【訪ねよう人生の師匠 [密着取材！人生の師匠]】の3本柱である。各活動を通して感じたことや考えたことをファイ



幼児教育のプロに学ぶ

ルに蓄積する。また、ポスターセッションによる情報交換の場を確保した。

2 活動の実際

(1) 事前指導

ア 「人間」イメージマップ

5年生で稲と豚を同時に育て、食と生命のつながりについて考えてきた子どもたちだが、人間としての生き方を問われると困り果てている。そこで、人間についての自分なりのイメージをマップにするところからスタートした。「人～感情～喜び～夢・・・」などと思いついたことをつないでいく。友達と比べてみる。すると、おぼろげながら追究テーマが見えてきた。「人のために働くとはどういうことだろう」「自分の夢を追い続け、その道を極めていく人には、どんな人がいるのだろう」「人間の体のことを知っている人に話を聞きたい」など、個々の興味や追求の方向性が明らかになり、グルーピングも可能になってきた。

イ かかわる相手についての学習

各方面で活躍されている先輩やその道のプロをリストアップし、教師と相談しながらコンタクトをとる。来校が決まると、その人の専門分野や業績について情報収集する。学校へお招きする準備や当日の交流の仕方についても共通理解を図った。一方、校外学習となる密着取材の方は、先方の都合に合わせ、往復の交通手段から質問内容まで計画を練った。

(2) 中心的な活動の展開

ア 自らかかわりを深めていく「ようこそ先輩，比角小学校へ[その道のプロに学ぼう]」

「課外授業」のゲストティーチャーとして、以下の先輩やその道のプロを学校に招き、対話や共同作業を通して交流を深めた。

(ア) 身近で将来の夢に向かって努力している先輩

- ・ 成人式にタイムカプセルを掘り出した、看護師をめざしている先輩
- ・ 教育実習生の先輩
- ・ 木造校舎建築をめざす先輩

(イ) 「その道のプロ」の先輩

- ・ ピアニストの先輩，福祉関係の先輩，天文学の先輩，華道の先輩，新聞記者の先輩，考古学の先輩，テディベア作家の先輩，太極拳の先輩，国際交流の先輩など

(ウ) 不慮の事故で受けた障害を克服しようと努力している大学教授の先輩

(エ) その道のプロ（先輩以外）

- ・ 難病と闘う画家，音響学，戦争の語り部，登山家など

同じ学舎で学んだ先輩から話を聞いたり、共に活動したりすることで、比角小学校で学ぶ自分に誇りを感じ、今後の生き方のヒントを得ることができた。また、かかわりの中で共感が生まれると、今度はこちらから何かを伝えたいという思いが強くなる。かかわりは「広く浅く」から、「狭く深く」へ。子どもが選んだ相手との交流ができるだけ継続され、深められるように支援した。



すいせいヒューマンタッチだより

車椅子の画家，　　さんとの交流は，今までの活動とはひと味違った深い思いを子どもたちの心の中に残しました。病気が進行していくことで，それまでできていたことができなくなるということの意味が子どもたちに伝わっていく中，どうしてあんなに明るくしていただけるんだろうと思わない子はいませんでした。そして，「絵筆が持てなくなっても，何かの方法で絵を描き続ける」という　　さんの言葉は，生きる意味を改めて見つめ直させてくれました。また，音響，天文学，考古学，国際交流，テディベアの5人のプロの方々との交流では，楽しく活動しながらそれぞれが専門分野に進んだ動機を探っていました。冬休みには，いよいよ卒業論文作成，まず自分史に挑戦してもらいます。

さんの生き方を聞いて

私は病気にかかったら，もう未来をあきらめて死んでいるか，それとも何もしないで生きていると思う。これは，生きることをあきらめてしまった考え方。だけど，　　さんはあきらめずに自分にできることを探して見つけて，がんばっていた。これはきっと，死を見すえて，それでも必死に生きようとしている考え方。だからすごいと思った。私は何も考えずに今まで逃げていた。できることがあっても逃げていた。これからは，前から来るものから逃げないようにしよう。　　さんのように，ハンディがあっても，きっと乗り越えられるように立ち向かおうと思う　　（6年女子）

ようこそ　先輩

今日，「ようこそ先輩」で，　　先輩に話を聞きました。考古学のこと，「皆の人間」が少し分かりました。いろんな話を聞いて，その中で印象に残ったのは，「当たり前なことでもそれが何でなのか……」と深く考えると，もう一つ何か分かるということ，嫌いなことをするより好きなことをする方がいい，好きなことなら苦にならないということでした。そして，「優しさや思いやりはとても大切だ」ということでした。自分の好きな考古学で友だちができるなんていいなあと思いました。私も将来は，自分のやりたいことを思いっきりやれたらなあと思います。

イ 学校を飛び出す「訪ねよう，人生の師匠」[密着取材！人生の師匠]



校区内（あるいは市内）在住で，自分が生き方を学びたいと思う人（人生の師匠）のもとに出向き，時間の許す限り張り付いて，その生き方を学ぶ活動である。実際に師匠の職場で話をしたり仕事を見学したりして，日々の師匠の生きる姿勢をまのあたりにし，よりよく生きることについて考えを深めていく。「保育園の先生を師匠に」と考えた子どもは，仲間を募り，自分たちで連絡をとり，指定された時間に訪問した。突っ立っているわけにもいかず，園児と遊び昼寝の面倒を見ることになる。しかし，学ぶのは保育園の先生の生きざまである。仕事の大変さや指導技術だけでなく，園児とかわる姿そのものに学ぶことが多かった。訪問先は，福祉施設，保育園，漫画家，医者，バスガイド，お菓子屋，ダンスの先生，スポーツのプロ等25カ所にも及んだ。教師は事前に訪問先と活動の目的や内容等の綿密な打ち合わせを行っていた。



「バスケのプロ さんにアタック」

自己紹介をし、早速質問タイムに移った。ぼくは、2番目に質問をした。その時、 さんはぼくの質問に対してとうより、 さんのバスケット人生を30～40分位すごく熱く語ってくれたし、基礎が大事とアドバイスしてもらったり、練習方法などすごく熱心に教えてくれた。その一つに子どものころかかとを上げて日常歩いていたらジャンプ力がUPした、といエピソードがあったので、ぼくと他4人がそれを見習ってかかとを上げてやっている。(明日はたぶん筋肉痛になると思う でも続ける。)ぼくは、 さんみたいに楽しいことをやってみたい。(6年男子)

子どもたちは仕事ぶりを間近に見せていただき、共に活動しながら交流を深めていった。そして、その人の願い、苦勞や喜びを感じ、生き方に触れることができた。中には、夏休みなどを利用して自主的に再訪するグループもあった。

思い切って学校を離れるには安全面から保護者のサポーターとしての協力が不可欠になるが、実社会で体験することのメリットは計り知れない。師匠と過ごした時間、学んだことは、自分たちだけにしか分からない。それをポスターセッションなどの形で友だちに伝え合うことで、自分の体験の意味を再認識することができた。



ポスターセッションを終えて

みんなの発表は、とてもおもしろかった。ピアノのプロと、お菓子作り(ピアードババ)のプロは、小さい頃からそれが好きで、なりたかったものになることができた。私はまだ、夢っていうのがはっきり決まってるから、はやく夢を決め、それに一生懸命向かっていきたいと思う。写真家のプロは、小さい頃はプロ野球選手になりたかったらしいけど、父親のあとをついで写真家になつたらしい。いつ夢をあきらめたとか、教えてほしいと思った。これからもいろいろな人生のプロに、たくさんのことを教えてもらいたい。(6年女子)

(3) 事後指導

体験活動後の感想をファイルに保存していき、ポスターセッション等で情報の共有化を図った。卒業論文は、第1章に自分史、第2章でよろんごタイムで学んだこと、第3章で自分なりの生き方について記述した。卒業式では、6年生なりに考えた人間としての生き方を一人一人が発表した。

3 体験活動のための体制

(1) 学校の体制、家庭や地域、関係団体・施設・機関等との連携

ア 教師は学年T Tの体制で、必要に応じて担任以外の教師に参加してもらった。

イ 事前に保護者から学習サポーターを募り、現地への引率等の安全確保を図った。

ウ 関係諸機関との事前・事後の連絡を密にした。

(ア) 活動のお願いは子どもが電話したが、あらかじめ活動計画書や事後のアンケートを教師がじかに届け、さらに詳しい打合せを行った。当日も、担当教師が必ず巡回するようにした。

(イ) 活動後、子どもたちの感想を添えた礼状を届け、今後の交流も重ねてお願いした。

(2) 指導者の確保等の手だてや工夫

校区や市の人材バンク、大学の出前講座等を活用したり、PTAや後援会の席で共通理解を図ったりし



手話のプロに学ぶ

て、ゲストティーチャーの確保に努めた。

(3) その他

ゲストティーチャーは、原則としてボランティアでお願いした。

4 成果と課題

(1) 成果

ア 子どもたちは社会体験の日を心待ちにし、当日も楽しそうに活動していた。活動後も自主的に先輩や師匠のもとに手紙を出したり訪問したりする姿が見られた。

イ 訪問先の「師匠」には、アンケートに活動の様子を評価・記述していただいた。その内容から、積極的に質問したり共に活動しようとしたりするコミュニケーション能力が育ってきていることが分かった。また、その人らしさが際だつその人の仕事場で、「その道のプロ」の生きざまに触れることができた経験や、難病と闘いながら生きがいを見つけ、それに打ち込んでいる人との出会いは、子どもたちの心に残り、自分の生き方を考えていく糧になった。

ウ 活動後のポスターセッションでは、活動を振り返り、学んできたことを再認識するだけでなく、友だちの紹介を聞いて「名言」をメモしたり、質問したりしながら様々な人間の生き方があることに気付くことができた。また、ポスターセッションで得た情報を分類整理しながら、同じ人の中にも様々な面があることや、全く違う分野のプロの間にも、生き方の上で共通性があることを発見していった。更に、共感した要因を見直すことで、自分にとってのよりよい生き方や価値観が自覚されていった。

(2) 課題

先輩・プロ・師匠と交流を深め、その専門性や人間性にふれるにつれ、子どもたちは視野を広げ、より豊かな生き方に考えを巡らす。しかし、憧れをもつ一方で、自分には追いつけない、どうせできないという意識をもちやすい。ポートフォリオを活用し、他のだれとも違う自分のよさに気付かせる手だてが必要である。

5 今後の取組

新教育課程においては、110時間の時数配分を熟慮し、よりダイナミックな体験活動を準備したい。校外での社会体験や子どもの心に感動を残すような「プロ」との交流は、まさに総合的な学習でしかできない体験であり、生き方を見つめるテーマ、相手に共感し自分のよさを見つめ直す体験が大切であろう。

【本事例活用にあたっての留意点】

小学校段階で、人間としての「生き方」を学んだり考えたりするための場を、どのような内容でいかに設定・展開していけばいいのか。比角小学校の実践はこの課題に対する優れたモデルの一つを提供してくれるものである。身近な先輩や師匠との交流体験は、現実の社会に根ざしながら、子どもたちが自らの夢や希望を育てていくための重要な機会である。

その際、小学校においては、将来の進路を絞り込んでいくという方向だけでなく、自己の可能性を発見しその幅を広げていく側面が重視されるべきであろう。その意味で、総合的な学習の時間の特質を踏まえながら、多様な人々・職種と様々な形でふれあうことができるようにするとともに、そのことを核に据え、事前の調べ学習、集団での討論等を通じた学習の共有化、個人テーマによる追求活動や卒業論文の作成などを組み合わせるなど、学習全体を有機的に関連付けている本校の取組から学ぶべき点は大変大きい。